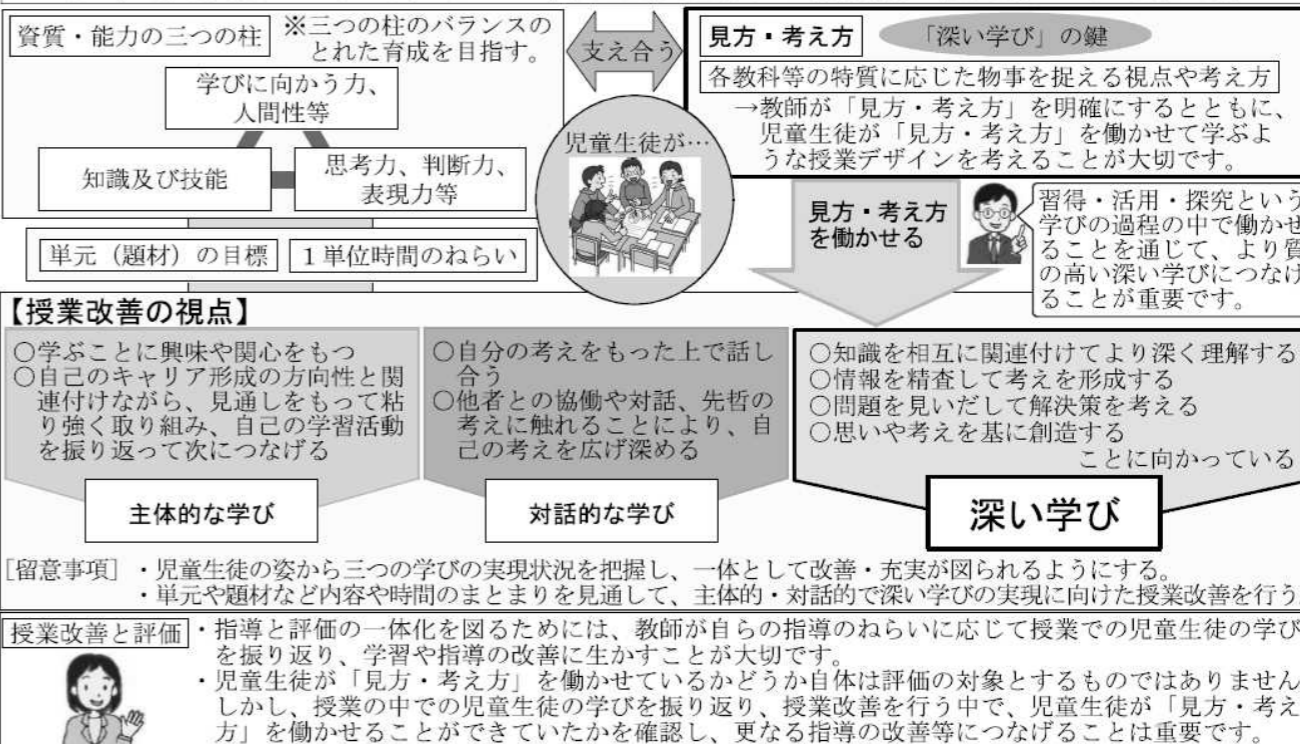


## 単元（題材）及び授業構想のポイント

### 資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

各教科等において目指す資質・能力を育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることが大切です。特に、「深い学び」の鍵となるのが「見方・考え」であり、児童生徒が「見方・考え」を働かせて「深い学び」を実現しているかどうかについて、児童生徒を主語とした授業改善の視点をもつことが大切です。



な意義を明確にする議論が展開され、各教科等において育成を目指す資質・能力が三つの柱に基づき整理されるときに、「見方・考え」も教科等ごとに整理された。「見方・考え」は、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」とされ、その教科等の本質、その教科等を学ぶ意義とも重なりとされる。さらに、「見方・考え」は「教科等の教育と社会をつなぐ」、言い換えれば、子どもたちが大人になって生活していく際にも重要な働きをするものでもある。

**II 「見方・考え」を働かせて資質・能力を育成する授業を実現する上で配慮すべき事項**

**(1) 学習指導要領の各教科等の目標と「見方・考え」**

まず、学習指導要領の教科等の目標に「見方・考え」を働かせることが含まれている(※1)ことを確認する必要があります。

そして、各教科等の学習指導要領の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1 (1)において、「見方・考え」を働かせる授業を実現するための学習活動の工夫について記載されている(※2)。「子どもたちが学習や人生において『見方・考え』を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮されることが求められる」とされ、「深い学び」の視点から授業改善をし、子どもたちの「見方・考え」を働かせる授業に迫ることが、教師に期待されている。

**(2) 授業デザインと「見方・考え」**

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を進める際には、子ども

たちが「見方・考え」を働かせて学ぶような授業デザインを考えることが重要である。

各教科等の特質に応じて、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、授業改善の在り方を検討することが求められている。

なお、各教科等の解説において示している各教科等の特質に応じた「見方・考え」は、当該教科等における主要な「見方・考え」を例示したもの(※3)であり、実際の授業で子どもたちが働かせる「見方・考え」については、その例示を踏まえながら、学習内容等に応じて柔軟に考えることが重要である。

**(3) 学習評価と「見方・考え」**

観点別学習状況の評価の対象はあくまでも各教科等で育成を目指す資質・能力をどの程度身に付けているかどうかであり、「見方・考え」を働かせているかどうかか自体を評価の対象とするものではない。

しかし、教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中で子どもたちの学びを振り返り、授業改善を行う中で、子どもたちが「見方・考え」を働かせることができているかを確認し、教師の更なる指導の改善等につなげることは重要である。

※1、※2、※3……資料2参照(各教科のみ作成)

**【参考】**

小学校学習指導要領(平成二十九年告示)解説 総則編  
初等教育資料2017年11月号  
初等教育資料2019年9月号

### 資質・能力を育成する「見方・考え」を働かせることを通じて

資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え」である。

「見方・考え」は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが求められる。

この「見方・考え」とは何なのか、「見方・考え」を働かせて資質・能力を育成する授業の実現に向けてどのようなことに配慮すればよいのだろうか。

#### I 「見方・考え」とは何か

**(1) 「見方・考え」の定義**

学習指導要領総則において、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」と定義されている。言い換えれば、各教科等にはそれぞれ学習対象があるが、その学習対象にどのようにアプローチしていくのかという視点や考え方によって捉えるのかという教科等の本質に迫るための視点や考え方が「見方・考え」である。

従来から数学や理科などの一部の教科においては類似の概念が用いられてきたが、今回の学習指導要領では、そうした従来の整理とは別に、全ての教科について、再整理している。

**(2) 「深い学び」と「見方・考え」**

今回の改訂における審議では、「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で、各教科等の資質・能力の育成の観点からは「深い学び」の視点は極めて重要であるとされてきた。「深まり」を欠くと表面的な活動に陥ってしまうという指摘もあつたからである。

また、「主体的な学び」や「対話的な学び」はその趣旨が教科共通で理解できる視点であるのに対し、「深い学び」の在り方は各教科等の特質に応じて示される必要があるとされ、各教科等の学びの「深まり」の鍵となるのが「見方・考え」であるという見解が示された。

#### (3) 「見方・考え」と資質・能力の三つの柱の関係

学習指導要領において「見方・考え」は、育成を目指す資質・能力の三つの柱とは別の概念として整理されている。

「見方・考え」は「深い学び」の鍵になるものとされているが、これは「見方・考え」を働かせることにより資質・能力が育まれるということである。すなわち、各教科等の学びを通じて子どもたちが資質・能力を獲得する過程で、子どもたちが「働かせる」ものである。

また、「見方・考え」を働かせることで資質・能力が更にも育まれたり、新たな資質・能力が育まれたりする。またそれによって「見方・考え」が更に豊かになる。というように、「見方・考え」と資質・能力は相互に支え合う関係にあるとされている。

#### (4) 「見方・考え」と当該教科等を学ぶ意義

今回の改訂においては、なぜそれを学ぶのか、それを通じてどのような力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的

## 言語活動を通して気づきや学びを見取る手立ての工夫

授業の構築において、本時で目指す姿を想定した上で言語活動に取り組ませ、その達成状況を見取るとともに、目的や場面、状況などに応じた支援や全体の中間評価を行うことが肝要です。このことが、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、深い学びを実現することにつながります。

### 言語活動の流れの指導例

